

秦漢朝の蛮夷統治政策について

織 田 晃 嘉

はじめに

巴郡・南郡は秦が、旧蜀・旧楚の地を征服後に設置した郡であり、漢に至っても内郡ではあるものの依然として蛮夷が数多く居住しており、後漢末から南北朝時代には当地の政治情勢を左右する勢力を築くようになる。つまり、巴郡・南郡は行政制度から見れば内郡であり、中華世界に取り込まれているが、住民構成から見れば依然蛮夷の地なのである。蛮夷を中華的行政制度である郡県制に取り込んでいくことは蛮夷の漢化、中華世界の拡大に他ならない。この一方では「華」世界に属しつつも他方では「夷」世界に属する巴郡・南郡における蛮夷統治政策の研究は蛮夷統治政策のみならず、地方行政制度の研究にも重要な位置を占めるものである。結果として完全な漢化には失敗したともいえるが、特に巴郡において後漢末まで殆ど大規模な反乱の記録が見られないことから統治自体は一定の成功を収めていたことがわかる。このような漢化過程の途上にある巴郡・南郡における蛮夷統治政策は外郡における蛮夷統治政策以上に中国王朝による蛮夷の漢化過程の一端をより鮮明に示すのではないか。

本稿ではまず『奏讞書』に示される前漢初期の南郡における蛮夷統治政策を考察した後、『華陽国志』巻一巴志（以下、巴志と简称）、『後漢書』巻八六南蛮伝（以下、南蛮伝と简称）に記される巴郡南郡蛮・板楯蛮の統治政策に

ついで検討し、前漢初期における巴郡・南郡において行われた蛮夷統治政策の一端を明らかにしたい。
なお『華陽国志』のテキストは、劉琳『華陽国志校注』（新文豐出版公司、一九八八年）による。

第一章 江陵張家山漢簡『奏讞書』から見る前漢初期の蛮夷統治政策

一、江陵張家山漢簡『奏讞書』

前漢初期の蛮夷統治政策を考察する上で非常に重要となる資料が江陵張家山二四七号漢墓出土竹簡『奏讞書』⁽¹⁾の第一案件である。案件は以下の通りである。

十一年八月甲申朔己丑、夷道潜、丞嘉敢讞之。六月戊子發弩九詣男子毋憂、告為都尉屯、已受致書、行未到、去亡。●毋憂曰、變 蠻 夷、大男子、歲出五十六錢以當繇（徭）賦、不當為屯、尉遣毋憂為屯、行未到、去亡。它如九。●窖曰、南郡尉發屯有令變 蠻 夷。律不曰勿令為屯、即遣之、不智（知）亡故、它如毋憂。●詰毋憂、律、變 蠻 夷男子歲出資錢、以當繇（徭）賦、非曰勿令為屯也、及雖不當為屯、窖已遣、毋憂即屯卒、已去亡、何解。毋憂曰、有君長、歲出資錢、以當繇（徭）賦、即復也、存吏、毋解。●問、如辭。●鞠之、毋憂變（蠻）夷、大男子、歲出資錢、以當繇（徭）賦、窖遣為屯、去亡、得、皆審。●疑毋憂罪、它縣論、敢讞之、謁報、署獄史曹發。●史當、毋憂當要（腰）斬、或曰不當論。●廷報、當要（腰）斬。

内容に入る前に標点について訂正すべき個所がある。従来は「南郡尉發屯有令、變 蠻 夷律不曰勿令為屯」と「令」と「變」の間に標点が打たれていたが、「南郡尉發屯有令變 蠻 夷。律不曰勿令為屯」と「夷」と「律」の間に標点を打つべきである。新しい標点に従えば、「南郡尉、屯を發するに蛮夷に令する有り。律には屯を為さしむる勿かれと曰わず」と訓読され、「南郡尉が徵発を行った際に蛮夷にも徵発令を下した。律には（蛮夷を）軍隊に徵発し

てはならないとは言っていない」と解釈できる。南郡尉の徵発が蛮夷にまで及んだことは毋憂の例により明かであり、また「蛮夷有り」と読むことによって、却って毋憂が特殊例でなく、他にも實錢を納入しながらも徵発された蛮夷がいたであろうことを示唆する表現となる。後半部は、蛮夷律の存在の有無に関わる重要な部分である。『奏讞書』の他の案件を見ると律を引く場合に具体的な律名を述べる箇所はない。また蛮夷律という律名が他の史料に見えない以上、蛮夷律という律の存在を想定することは危険である。また「律不曰」という表現は他には見られないが、「律曰」とは逆に律に規定がないという表現であろう。

以上をふまえて案件の内容を整理する。毋憂は自分は蛮夷の大男子であり、毎年君長に實錢五六錢を納入して徭・賦に充てることによって復を受けており、屯に赴く必要はなかったと主張し、一方の尉習は律には蛮夷の大男子を屯に徵発してはならないという規定はないから毋憂の徵発は問題なく、一度徵発された後の毋憂は卒となっているので逃亡の罪に問われると主張した。以下、毋憂を屯に当てるのが合法であるか議論が繰り広げられる。最終的に廷尉にまで上っていることからかなり難解な案件であったことがわかる。

この『奏讞書』を用いた蛮夷統治体制の研究には伊藤敏雄氏の研究が見られる^②。氏は戦国秦漢の統治政策について「蛮夷の税役負担は、時期や地域、生活形態、帰順の程度によって異なり」、「戦国秦漢では、原則的には懐柔するために一般郡県民より負担を軽減し、徭役は免除して實錢五六錢を納入させたほか、特産品として實布などの布を納入させた」と述べている。筆者の理解も伊藤氏とほぼ同様であるが、細部には意見を異にする部分もある。以下に前漢初期を中心に検討していきたい。

二、軍隊の平時編制・軍時編制と蛮夷の徵発

まず案件の冒頭に見える「十一年」は前漢高祖十一年である。また讞した人物の官職名から被告人の毋憂が南郡夷

道に居住していたことがわかる。次に毋憂が徵発された時代・地域的背景を考えたい。李学勤氏はこの案件の背景を南越と関係のあるものと考えている^③。高祖十一年五月には陸賈を使者として南越に派遣、趙佗に南越王号を与えている。李氏は南越に使者を派遣すると同時に南方に対して威圧を掛けるために边防を固める必要があったと述べている。しかし当時南方において南越より更に喫緊の事態、それも南越に譲歩、王号を認めてまでも南方を固めるべき事態が生じていたのである。淮南王英布の不穏な動向であった。

淮南王英布の反乱は毋憂の徵発の一ヶ月後、七月に発生している。英布は「十一年、高后誅淮陰侯、布因心恐。夏、漢誅梁王彭越、盛其醢以遍賜諸侯。至淮南、淮南王方獵、見醢、因大恐、陰令人部聚兵、候伺旁郡警急」(『漢書』卷三四英布伝)と乱を起こす七月以前から誅殺される危機を感じて警戒を強め、漢王朝の側も淮南王国内の内紛を調査し、英布の乱を起こす兆候を見て取っている^④。かくして英布の反乱に備えて周囲の警備を強化する必要がある、その際に毋憂も徵発されたのである。「上乃發上郡北地隴西車騎、巴蜀材官及中尉卒三萬人、為皇太子衛、軍霸上」(『漢書』卷一下・高帝紀下、一一一年)と高祖が英布に対して発した覇上の軍勢には南郡から徵発兵は見えないが、「上赦天下死罪以下、皆令從軍、徵諸侯兵、上自將以擊布」(『漢書』高帝紀下)と覇上以外にも軍勢の徵発が見られ、英布の西方への攻撃^⑤を警戒する必要がある南郡でも徵発が行われたことは間違いない。そして「告為都尉屯」とあるが、この都尉は地方官の都尉ではなく中央の軍事担当官である^⑥ことから通常の兵役ではなく、臨時徵兵と考えるのが妥当である。重近啓樹氏は秦漢の軍事編成は平時編制と戦時編制に分類され、戦時には常備軍以外の臨時徵兵が行われると述べている^⑦。南郡には発弩官が設けられており(『漢書』卷二八上地理志上)、『奏讞書』の「發弩」もこの官、もしくはその属官であって、狩獵を生業とし弓矢に優れた蛮夷を臨時徵発したのである。通常の兵役ならば徭役の一部であり、蛮夷の男子は服する必要はないのであるが、この度の徵発は英布の乱に対応するための臨時徵集であり、であるからこそ逆に戦闘力となる蛮夷が徵発されたのである。毋憂と尉奢の最大の論点の相違は臨時徵兵

に蛮夷を充てることは是非であり、律にも蛮夷の臨時徴兵に関する規定が存在しなかったため論議が紛糾したのである。最終的に廷尉まで上がったこの案件も毋憂の腰斬という断が下される。つまり蛮夷の臨時徴兵が容認されたのである。以後、判例となつて蛮夷の臨時徴兵が合法となつた可能性が高い。

三、實錢五六錢

毋憂が徴兵忌避の根拠としたのは實錢五六錢の納入であつた。この實錢とはいかなる賦税であるのか。『奏讞書』の案件中の實錢に関する記述は「變蠻夷、大男子、歲出五十六錢以當繇（徭）賦」「律、變蠻夷男子歲出實錢、以當繇（徭）賦」「有君長、歲出實錢、以當繇（徭）賦、即復也」「憂變（蠻）夷、大男子、歲出實錢、以當繇（徭）賦」と四回出てくる。総合すると「君長の支配下にある蛮夷の大男子は毎年五六錢の實錢を納入することによつて徭賦に充てることができる。徭賦は復に相当する」となる。律に定められている規定であり、尉詔も認めており問題はない。

實錢が充てられる「徭賦」とは徭と賦、つまり徭役と賦税であり、實錢とは徭・賦の代替である。實錢を納入し、徭・賦に充てることが復であるという記述から實錢以外の賦税の存在は否定される。また「有君長」とあることから君長に属して始めて實錢が徭・賦の代替として認められている。君長による間接統治体制を示唆する表現である。南郡は旧楚の領域で蛮夷の多く住む地である。支配が完全に浸透していない前漢初期の段階では君長に一定の支配を認め、王朝の支配体制に協力させる間接統治体制が安定支配に不可欠の措置であつたのである。

では實錢とは具体的にどのような賦税であるのか。實については「實、南蠻賦也」（『說文解字』卷六下）とあり、蛮夷に課される賦であることは明らかである。同時に實民と部族名称にも用いられる（後述）。また實の字を冠する税目として實錢以外に實布が南蠻伝武陵蛮条に見られる。

秦昭王使白起伐楚、略取蠻夷、始置黔中郡。漢興、改為武陵。歲令大人輸布一匹、小口二丈、是謂實布（南蠻傳）

野中敬氏は實布は棕櫚の皮で作られた布で、防水性・伸縮性に富み軍需物資として徴用されたとする⁸⁾。『奏讞書』では實銭は五六銭と銭高で表示されている。實銭は本来は武陵蛮のように實布による現物納であり、秦代に「錢十一當一布。其出入錢以當金布、以律」(『睡虎地秦墓竹簡 金布律)と銭と布の交換比率が定められていたように、實布も一定の交換比率が定められていたであろうが、實布が軍事物資としての有用性が評価されていることから、実際には現物納されていたのであろう。

では通常の内郡のように口数を把握して徴税することが蛮夷においても可能であったのだろうか。後漢代のことであるが、「時大郡口五六十萬舉孝廉二人、小郡口二十萬并有蠻夷者亦舉二人（中略）凡口率之科、宜有階品、蠻夷錯雜、不得為數」(『後漢書 卷三七丁鴻伝)とあるように蛮夷は民戸とは別個に把握されていた。前漢、淮南国では「諸從蠻夷來歸誼及以亡名數自占者、内史縣令主」(『漢書 卷四四淮南厲王長伝)とあるように、蛮夷は内史・県令のラインで把握されており、他郡でも同様に郡守・県令が蛮夷を統括し、蛮夷の口数を個別的に把握していたであろう。王朝側は實銭納入義務者の人数を確実に把握、特に南郡のような郡県制の浸透度が高い地域では通常の民戸並の個別把握が進展していたとみられる。蛮夷各個人が納入義務があることと合わせると君長は蛮夷個々人から實銭を集め、人数分を納入していたと考えられる。また蛮夷が君長に対して負う負担は實銭以外にも確実に存在したと思われるが史料の欠如のため詳細は不明である。

第二章 前漢における巴郡南郡蛮統治政策

一、秦の巴郡南郡蛮統治政策

前章で見た『秦讞書』第一案件の主人公たる毋憂は南郡夷道に居住していた。夷道は「夷水東至夷道入江」（『漢書』地理志上南郡巫県）とあるように夷水なる川が長江と合流する地点である。そして夷水流域には巴郡南郡蛮と呼ばれる部族が居住していた。南蛮伝には以下のように秦漢代の巴郡南郡蛮統治政策を記している。

及秦惠王并巴中、以巴氏為蠻夷君長、世尚秦女、其民爵比不更、有罪得以爵除。其君長歲出賦二千一百六錢、三歲一出義賦千八百錢。其民戶出幪布八丈二尺、雞羽三十鋸。漢興、南郡太守靳彊請一依秦時故事。

文末に見えるように秦代の巴郡南郡蛮統治政策を襲ったのは巴郡守でなく南郡守であることから、巴郡南郡蛮への統治政策は南郡で施行された政策であることは明らかである。靳彊は『秦讞書』中では第一四案件と第一五案件にも「南郡守強」とその名が見える（第一四案件では八年、第一五案件では七年）が、「（高祖）十一年薨」（『漢書』卷一六高祖功臣表、汾陽嚴侯靳彊）とあることから第一案件が扱われた一年には既に郡守を退いていた可能性も高い。しかし、靳彊の南郡守就任期間を遠く離れない時期のものであることから、靳彊の在任退任を問わず、高祖十一年には南蛮伝に見える巴郡南郡蛮統治政策と同一の蛮夷統治政策が行われていたと見てよいだろう。巴郡南郡蛮に関しては漢代の政策は秦代の政策を踏襲したものであることから、以下に秦代の政策も含めて考察する。

工藤元男氏は南蛮伝の記事から戦国秦の巴郡南郡蛮統治政策について、「巴を征服した戦国秦は巴王を貶して君長とし、その君長をかれの率いる巴の民を秦の爵制秩序の中に組み込み、その民にいたるまで、一定の法制支配を及ぼしたことが知られる」と述べている^⑨。巴氏が「世尚秦女」と代々秦出身の女性を娶ったことについて工藤氏は

秦は支配下の人々を「父母とも他国人であるが、（本人は）その後秦に入り、嘗て移住している者」である「真」と「故秦（固有の秦土）出身の母親」をもつ「夏子」に分類、「秦の勢力圏内に居住している人物が「真」「夏子」のいずれに属するかは、一にその母親の身分にかかっていることになる」としている。「世尚秦女」とは次世代の巴氏が秦女を母親に持つことであり、巴氏の「夏子」化を意味する。蛮夷の君長であった巴氏は婚姻政策によって世代を経る毎に秦に同化されるのである。巴氏の勢力の削減と取り込みを狙ったものである。次に『秦讞書』の記載と関連して注目されるのが巴郡南郡蛮の民は「其民爵比不更、有罪得以爵除」と不更に比する待遇を与えられ、その民爵によって贖罪することができたことである。「比」であるから実際に不更の民爵が与えられたわけではない。また民爵を以て贖罪するという表現も実際に内地のように民爵を以て贖罪したのではない。巴郡南郡蛮が秦の律令でなく巴氏の従来の部族法によって裁かれたことを表現したものであり、巴郡南郡蛮において間接統治が認められていたことがわかる。征服直後の秦は律令を全面的に施行するまでには支配が浸透しきっておらず、間接統治体制を取らざるを得なかったのである。『秦讞書』の記載には賦税面における間接統治体制を示唆する表現が見られるが、同族である巴郡南郡蛮にも間接統治体制を布いていた形跡が見られるのである。

四、巴郡南郡蛮統治政策中の賦税制度

次に賦税待遇の面から巴郡南郡蛮統治政策を考察する。まず蛮夷の民戸は「幪布八丈二尺、雞羽三十銖」と現物納で賦税を支払っている。幪とは「幪、南郡蠻夷實布」（『説文解字』巻七下）とあり、實布と同一のものである。雞羽は弓矢の材料となる巴蜀特産の大型の鶏の羽であり、どちらも貴重な軍需物資であった¹⁰⁾。

君長の納めた賦税は「歳出賦二千一十六錢、三歳一出義賦千八百錢」である。伊藤氏が指摘するように賦二〇一六錢は『秦讞書』の實錢五六錢の記述との関連から實錢であると見られる。一人五六錢ならば二〇一六錢は三六人分に

しかならず、巴氏の支配下の民戸が少なく感じられる。しかし巴郡南郡蛮に対して秦本土のような戸籍が整備され、個別支配が徹底していたとは考えにくく、秦本土のような口賦の賦課は不可能であったに違いない。三六戸という数字は実際の戸数ではなく概数もしくは象徴的な数であり、巴郡南郡蛮への優遇策、租税軽減策の一環である。漢は秦の政策を踏襲したとする記述は、巴郡南郡蛮に施行された、君長が實錢を取りまとめて納入する間接統治策が『奏讞書』に見える實錢の徴収方法とも一致することからも確認される。

義賦については他に用例が見えないが、蛮夷が王朝に帰順することを帰義といい、この用語は戦国秦に始まる^[11]ことから義賦とは帰義の用語と関係有すると推測される。さらに「又其實幪火毳馴禽封獸之賦、輪積於内府」(『後漢書』南蛮伝)と他の珍奇な物産と共に實布・幪布が内府に納められている。君長、もしくはその使者が義賦を直接都に赴いて納めたのではなからうか。二〇一六錢も一八〇〇錢も錢高換算額であり、共に一部は物納されていたのである。また三年という期間は漢代、辺郡の上計が三年に一度であった^[12]ように僻遠なるを考慮しての措置であろう。

巴郡南郡蛮は秦の支配下において間接統治体制を認められ、部族法により部族員を裁き、賦税は君長が民戸から徴収した幪布・雞羽を取りまとめて實錢を二〇一六錢相当、義賦は一八〇〇錢相当を錢納もしくは現物納あるいは、錢と現物の折納していたのである。

第三章 前漢における板楯蛮統治政策

一、板楯蛮の名称

巴蜀史研究の基本資料となる『華陽国志』中の巴志には以下のように板楯蛮についてのまとまった記載が見られる。板楯蛮については南蛮伝にも記されるが、明らかに巴志を参照したものであるので、本稿では巴志の記述をもと

に考察を進める。

秦昭襄王時、白虎為害、自秦蜀巴漢患之。秦王乃重募國中「有能殺虎者邑万家、金帛稱之。」於是夷胸忍廖仲葉何射虎秦精等乃作白竹弩於高樓上、射虎。中頭三節。白虎常從群虎、瞋恚、尽搏殺群虎、大响而死。秦王嘉之曰「虎歷四郡、害千二百人。一朝患除、功莫大焉。」欲如要、王嫌其夷人、乃刻石為盟、要復夷人頃田不租、十妻不算。傷人者論、殺人雇死倭錢。盟曰「秦犯夷、輸黃龍一雙。夷犯秦、輸清酒一鍾。」夷人安之。漢興、亦從高祖定乱、有功。高祖因復之、專以射白虎為事。戶歲出實錢口四十。故世號白虎復夷。一曰板楯蠻。今所謂犛頭虎子者也。

漢高帝滅秦、為漢王、王巴蜀。閬中人范目、有恩信方略、知帝必定天下、說帝、為募發實民、要与共定秦。秦地既定、封目為長安建章鄉侯。帝將討關東、實民皆思歸、帝嘉其功而難傷其意、遂聽還巴。謂目曰「富貴不歸故鄉、如衣繡夜行耳。」徙封閬中慈鄉侯。目固辭。乃封渡沔泉侯。故世謂「三秦亡、范三侯」也。目復除民羅朴咎鄂度夕龔七姓不供租賦。閬中有渝水。實民多居水左右、天性勁勇、初為漢前鋒、陷陣、銳氣喜舞。帝善之、曰「此武王伐紂之歌也。」乃令樂人習學之。今所謂「巴渝舞」也。

巴志の記述は 前半部と 後半部の二部に大きく分けることができる。両者の記述に注目すると劉邦を では「高祖」と、 では「漢高帝」「帝」と記す。さらに板楯蠻を では「白虎復夷」「板楯蠻」「犛頭虎子」と、 では「實民」と記していることに気付く。 とでは明らかに語調が異なっているのである。また劉邦に従軍した後の待遇では板楯蠻全体が「戸歲出實錢口四十」の待遇を受けたとし、 では「七姓不供租賦」のみを述べ、實錢については触れていない。 とは語調以外に同じ劉邦従軍の褒賞についても全く別の記述をしているのである。 とは本来は別系統の伝承であって、巴志において連続して記述されているが一続きの伝承ではないとみられる。後半の「實民」七姓は免税特権を得ていること、七姓のうち「巴七姓夷王朴胡、實邑侯杜濩舉巴夷、實民來附」(『三国志』

卷一武帝紀、建安二〇年」と朴姓の首長が後漢末に見られることから七姓は板楯蛮の中の支配者階級であつたに違いない。秦代には 記されるような板楯蛮のみが存在していたが、三秦征伐の功績により特別待遇を受ける七姓が生じたのである。

漢代において王朝側は板楯蛮を「賁」の名称で把握していたのであろう。前出の「賁邑侯杜濩」の他、「漢歸義賁邑侯」金印⁽¹³⁾に見られるように前漢・後漢とも首長に対して賁の名称が用いられていることから証明される。それに対して板楯蛮の名称は三国蜀印と目される「板盾夷長」⁽¹⁴⁾に見え、漢印には見られない。文献資料には益州計曹掾程包の言に「板楯七姓、以射白虎為業、立功先漢」(巴志)との表現が見えることから後漢後期には使用が確認される。賁錢を君長が取りまとめて納入するため、漢人から見て賁錢を納入する主体となる七姓が賁民と呼ばれることになったのであろう。板楯蛮は漢代には公式には賁と呼ばれていたが、後漢後期から各種の軍事活動に従軍、「神兵」とまで呼ばれるようにその勇猛さが名高かつたため、次第に武勇の象徴である「板楯」の名称を以て呼ばれるようになったのであろう。

二、前漢初期の板楯蛮統治政策

を見ると、板楯蛮統治政策を秦代には「要復夷人頃田不租、十妻不算、傷人者論、殺人雇死俠錢」とし、前漢代には「高祖因復之、專以射白虎為事。戸歲出賁錢口四十」といい、租稅負擔の内容が変化している。前漢代の年ごとに一人賁錢四〇錢を納めるという待遇は三秦征伐の功績によって与えられた優遇であることがわかる。復とは「除く、免除する」意で使用され、それ自身が特定の税目の免除を意味するものではなく、どの税目を復するかはそれぞれ個別に異なっていた⁽¹⁵⁾。秦代も前漢代も同じく「復」と記すも、その「復」の内容はそれぞれ異なっていたのである。板楯蛮における「復」は『奏讞書』に見られる賁錢を納入し、賦稅徭役を免除されるものと同様の「復」であ

る。巴郡・南郡両郡における蛮夷統治政策の根本は同一であったのである。ただ巴郡南郡蛮の一人当たりの實銭は五六銭であり、板楯蛮の四〇銭の四割り増しとなる。王朝への従順度による加算分である。しかし内郡では算賦が二二〇銭であり、他にも賦租などの負担があったことを考えると板楯蛮より重いといえ巴郡南郡蛮の負担も十分軽微であり、優遇税制の範囲内であると言える。

次に に記される支配階級たる七姓の「不供賦租」について考察したい。劉邦は統一後に漢王時代から従軍していた士卒に対して「令士卒従入蜀漢關中者皆復終身」(『漢書』高帝紀下、一一一年)、「入蜀漢定三秦者、皆世世復」(『漢書』高帝紀下、一一二年)と復を与えており、七姓の扱いもこれに準ずるものである。後漢代には「至于中興、郡守常率以征伐」(南蛮伝)と郡守が板楯蛮を従軍させる記載が見え、後漢後半になると板楯蛮が羌や武陵蛮の反乱鎮圧に動員される記事が多く見られるようになる。七姓は高祖との盟約によつて賦(實銭)が免除される対価として従軍義務を負っていたのである。板楯蛮も「專以射白虎為事」とあることから一定の従軍義務を負っていたことは推測される。七姓は支配階級として有事の際には司令官となつて板楯蛮を率いて従軍したのである。

先に『秦讞書』を取り上げ、蛮夷には当初は兵役義務が課されていなかったと述べた。兵役義務が課されなかったのは南郡統治下の巴郡南郡蛮である。巴郡南郡蛮は實銭を納入する代わりに兵役を免除されていたのに対し、板楯蛮のうち七姓は有事の際に従軍する対価として實銭を免除されていたのである。板楯蛮は前漢との関係が三秦征伐に始まることから特に軍事的貢獻を期待されたのであろう。前漢の蛮夷統治政策は一律に施行されるのではなく、各個の部族の状況に応じて様々な政策が採られたのである。

おわりに

以上、『奏讞書』の記載を中心に、『華陽国志』南蛮伝も利用しながら巴郡・南郡における蛮夷統治政策の考察を進め、その一端を説明した。

蛮夷の負担は實錢と兵役義務である。實錢は實布・幪布の大きさを示す場合もあれば、實錢五六錢のように錢高換算される場合もある。實錢は賦税・徭役の代替として納入する税目であり、君長が責任をもつて取りまとめて納入したのであるが、秦代には概数で示された納入者数が漢代には戸籍の整備に伴って厳密に換算されるようになっており、前漢による支配の強化が見られる。また武勇を以て奉仕した板楯蛮の一部（七姓）は兵役義務の代わりに實錢を免除されたが、巴郡南郡蛮などの板楯蛮以外の蛮夷は實錢を納入する代わりに兵役義務を免除されていた。しかし『奏讞書』に見られるように英布の反乱を契機に有事の際には蛮夷の徴兵も認められるようになった。兵役分野においても實錢同様、漢代に入つての支配の強化が窺えるのである。さらに王朝側からの支配の強化は単なる負担の増加のみではなく、三秦征伐の功績による七姓の特別待遇、秦女をめとることによる巴氏の夏子化など君長層への介入にも表れている。秦漢時代を通じて蛮夷政策全体が支配を強化する方向へむかい、後漢末に地方政治の弛緩と苛斂誅求によつて反乱を起こすに至るまで、その蛮夷統治政策は順調に行われていたのである。

秦漢代の蛮夷統治政策の基本は間接統治体制であり、その政策は一律にすべての蛮夷に施行されるものではなく、蛮夷の状況に応じて柔軟に様々な形態をとつて施行されている。そして秦から漢代に入ると郡県制支配が次第に浸透すると同時に蛮夷への支配も次第に強化されていったのである。

- 註 (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15)

江陵張家山漢簡整理小組「江陵張家山漢簡『秦讞書』 釈文（一）」（『文物』一九九三年八期）。釈文は飯尾秀幸「張家山漢簡『秦讞書』をめぐって」（『専修人文論集』五六、一九九五年）を参考した。

伊藤敏雄「中国古代における蛮夷支配の系譜 税役を中心として」、『堀敏一先生古稀記念中国古代の国家と民衆』汲古書院、一九九五年。

李学勤「『秦讞書』 解説（上）」、『文物』一九九三年八期、三〇頁。

赫至、上變、言布謀反有端、可先未發誅也。上以其書語蕭相國、蕭相國曰「布不宜有此、恐仇怨妄誣之。請繫赫、使人微驗淮南王、布見赫以罪亡上變、已疑其言國陰事、漢使又來、頗有所驗、遂族赫家、發兵反」（『漢書』英布伝）。

上乃見問薛公、對曰「布反不足怪也。使布出於上計、山東非漢之有也。出於中計、勝負之數未可知也。出於下計、陛下安枕而臥矣」上曰「何謂上計」薛公對曰「東取吳、西取楚、并齊取魯、傳檄燕、趙、固守其所、山東非漢之有也」（『漢書』英布伝）。

飯尾氏「張家山漢簡『秦讞書』をめぐって」九六頁。

重近啓樹「兵制の研究」、『秦漢税役体系の研究』汲古書院、一九九九年、二三〇頁。

野中 敬「西晋戸調式の『夷人輸實布』条をめぐって」、『東方学』九五、一九九八年、七頁。

工藤元男「秦の領土拡大と国際秩序の形成」、『睡虎地秦簡よりみた秦代の国家と社会』創文社、一九九八年。

野中氏「西晋戸調式の『夷人輸實布』条をめぐって」七頁。

熊谷滋三「前漢における『蛮夷降者』と『帰義蛮夷』」、『東洋文化研究所紀要』一三四、一九九七年、四三頁。

鎌田重雄「郡国の上計」、『秦漢政治制度の研究』日本学術振興会、一九六二年。

潮見 浩「『漢歸義實邑侯』金印」、『東アジアの考古と歴史』上、同朋舎出版、一九八七年。

羅福頤「秦漢南北朝官印徵存」文物出版社、一九八七年、二六九頁。

重近氏「漢代の復除」、『秦漢税役体系の研究』汲古書院、一九九九年、二二二頁。

大学院文学研究科博士課程後期課程